

特徴が分かる別名

1. ジョウビタキ

木枯らし1号が吹くと、翌日に姿を見せる鳥です。北西の季節風によって渡来するのでしょうか。ヒタキと呼ばれる仲間は「火焚き」の意味で、「カッ、カッ」という鳴き声が火打石を打つ音を連想したものといわれています。地鳴きという鳴き方で、「ヒッ、ヒッ」の方が多いのですが、「カッ、カッ」も混ぜます。この特徴的な鳴き声で遠くからでも存在に気付くのですが、打吹山ではルリビタキも同じような声なので、識別は慣れていないと難しいでしょう。



ジョウビタキのジョウは、雄の頭部が「尉」(じょう:能でいう老人の男性)の白髪頭を思わせるところからきたものです。雌と色彩が大きく異なりますが、翼の白斑は雌雄共通です。よく目立つことからモンツキドリとも呼ばれます。倉吉ではヤマノカミ(山の神)と呼びます。尾を上下しながら時々ぴょこんと頭を下げる仕草が、日々、我が家の山の神に頭の上がらない男性が名付けたのでしょう。

人をあまり恐れず近づける鳥です。冬期は個体毎にナワバリを持ち、ほぼ決まった場所をパトロールしていますが、4月の渡去前には集まってきます。

2. シャシャンポ

スノキの仲間(ブルーベリーも)の、低木でアントシアニンに富んだ食べられる実がつきます。熟す時期は10月末のナツハゼより1ヶ月くらい遅れます。スノキやナツハゼは落葉性ですが、シャシャンポは常緑です。乾燥した場所に生えるため、長谷寺の四国八十八ヶ所や打吹山の南面に多くみられます。実がなるためには日当たりが必要で、樹林内に生えている木は結実しません。房となって結実し、夏は葉と同じ緑色をしています。種子が成熟すると黒紫色となり、甘酸っぱく美味しくなります。鳥にとっても目につくようになり、鳥が食べて糞とともに種子を散布してもらいます。



倉吉周辺ではセンダラシブと呼び、子どもの食べ物でした。ナツハゼの実より小さく、墓に供えるシブ(標準和名ヒサカキ)の実と比較したのでしょうか。果実の頂部に河童の頭のような萼(がく)の痕が残るところはナツハゼと同じなのですが、ナツハゼの方はこの特徴を捉えて、倉吉では「アタマハゲ」と呼びます。

シャシャンポの語源は、牧野植物図鑑では「小小坊」の訛ったものとしてありますが、諸説あるようです。